

MEMO



日本地質学会第120年学術大会 公開シンポジウム

東日本大震災：あの時、今、これから

日時：2013年9月15日(日) 14:30～18:00

会場：東北大学百周年記念会館 川内萩ホール

共催：東北大学理学研究科・東北大学災害科学国際研究所・
東北大学東北アジア研究センター・東北大学学術資源研究公開センター
後援：宮城県教育委員会、河北新報社、TBC 東北放送

東日本大震災は我々に多くの教訓を残した。地質学的研究により、東北沿岸は、過去に、大規模な津波に繰り返し襲われていたことが明らかにされていたにも関わらず、その事実が行政や住民に理解・周知されず、十分な防災・減災対策がとられなかつた。一方、東日本大震災の甚大な被害を契機として、東海・東南海・南海（運動型）地震に対する関心が高まり、被害予測は大幅に引き上げられ、適切な防災・減災対策を速やかに考え、実施することが要請されている。そこで、本シンポジウムでは、東日本大震災が発生した時に何が起きたのか（あの時）、その結果、どのような状況にあるのか（今）、そして、これから何が起きるのか（これから）について、気鋭の研究者7名に研究成果を公開していただき、議論するとともに、将来を展望する。

講演者

- 日野 亮太（東北大学教授）
2011年東北地方太平洋沖地震の実像に迫る
- 今村 文彦（東北大学教授）
巨大津波の来襲と避難行動
- 木島 明博（東北大学教授）
東北マリンサイエンス拠点形成事業とこれまでの成果について
- 秋元 和實（熊本大学准教授）
先端海洋調査機器を用いた沿岸域のガレキ分布調査に関する成果
- 松澤 暢（東北大学教授）
2011年東北地方太平洋沖地震後の地殻活動について
- 今泉 俊文（東北大学教授）
活断層研究と評価の現状と諸問題
- 島崎 邦彦（東京大学名誉教授、原子力規制委員会委員）
東日本大震災：科学者と社会への一視点



東日本大震災： あの時、今、これから



1 2011年東北地方太平洋沖地震の実像に迫る

ひのりょうた
日野亮太 (東北大大学災害科学国際研究所・教授)

《講師プロフィール》
生年・出身地 ▷ 1964年・奈良県 専門 ▷ 地震学（海底地震、測地学）

“あの時”は ▷ 宮城県沖地震を間近で捉えよう、と海底観測を強化していたところに、はるかに巨大な地震が発生していました。貴重な観測記録を得ることはできましたが、「狙いが外れた」ことには違いなく、忸怩たるものがあります。



2 巨大津波の来襲と避難行動

いまむらふみひこ
今村文彦 (東北大大学災害科学国際研究所・教授)

《講師プロフィール》
生年・出身地 ▷ 1961年・山梨県 専門 ▷ 津波工学、災害科学

“あの時”は ▷ 午前中に気象庁で津波警報に関する会議を終えて、次の会議のために、霞ヶ関付近で昼食を食べ終わった所でした。宮城県沖での地震・津波に対して、地域と防災・減災の活動を展開していましたが、まったく十分ではありませんでした。



3 東北マリンサイエンス拠点形成事業とこれまでの成果について

きじまあきひろ
木島明博 (東北大大学院農学研究科・教授)

《講師プロフィール》
生年・出身地 ▷ 1953年・東京都 専門 ▷ 海洋生物学、水産遺伝育種学

“あの時”は ▷ モスクワ出張から帰国、東北大大学片平本部事務機構前でタクシーから降りようとした瞬間、激しい揺れに襲われました。史料館の屋根瓦（スレート）がばらばらと滑り落ちる音、樹木の大きな揺れ、あちこちから聞こえる悲鳴が聞こえました。



4 先端海洋調査機器を用いた沿岸域のガレキ分布調査に関する成果

あきもとかずみ
秋元和實 (熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター・准教授)

《講師プロフィール》

生年・出身地 ▷ 1956年・東京都 専門 ▷ 微古生物学、海洋地質学

“あの時”は ▷ 有明海（本渡市）でも波高0.8mの津波が予想されたので、大学所有の実習船を避難させました。仙台を離れて20余年が過ぎましたが、妻の実家が一間にあり、親戚も気仙沼にいますので、東北は第2の故郷と思っています。しかし、何もできぬまま、津波と火災による甚大な被害を報じていたニュースを見続けていました。翌日から、自治体・漁協から水中のインフラ（港湾や養殖施設など）や漁場の被災状況の調査を依頼されました。依頼に応えようと思い、手を尽しましたが備船できず、忸怩たる思いで断念しました。



5 2011年東北地方太平洋沖地震後の地殻活動について

まつざわとおる
松澤暢 (東北大大学院理学研究科・教授)

《講師プロフィール》

生年・出身地 ▷ 1958年・新潟県 専門 ▷ 地震学

“あの時”は ▷ 2011年当時、貞觀地震の特徴が次第に明らかになり、海底地殻変動観測もようやく軌道に乗り、あと10年あれば状況はかなり違っていたように思います。1978年宮城県沖地震のときも1983年日本海中部地震のときも地震学者は同じような思いをしました。まだまだ見落としている大地震があるはずで、それを少しでも早く明らかにしていきたいと思っています。



6 活断層研究と評価の現状と諸問題

いまいづみとしふみ
今泉俊文 (東北大大学院理学研究科・教授)

《講師プロフィール》

生年・出身地 ▷ 1952年・長崎県 専門 ▷ 変動地形学、自然地理学

“あの時”は ▷ 学生実習で房総半島に向かう途中で、霞ヶ浦付近を運転中でした。震源地を確認して近くの台地に避難。水・食料を確保して、奥羽山脈沿いの路を通り3日目に帰仙。それからは大変な日々でした。



7 東日本大震災：科学者と社会への一視点

しまざきくにひこ
島崎邦彦 (東京大学名誉教授、原子力規制委員会委員)

《講師プロフィール》

生年・出身地 ▷ 1946年・東京都 専門 ▷ 地震学

“あの時”は ▷ 東京で高層ビルの11階で揺れを経験、震源の詳細情報を得ようとしているうちに、最大余震の揺れに襲われ、机の下で「もう勘弁して欲しい」と思いました。TV局の電話で建物外へ出てみて、溢れる人や車にびっくり。

